HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	北海学園大学人文学会記録　第４回例会ミニシンポジウム「映画とおもちゃと博物館 ： アイヌと民族表象をめぐって」　（記録の中の〝おもちゃ" と〝遊び" ： 記録映像『沙流川アイヌ子どもの遊び』への出演経験を経て）
著者	貝澤，太一; KAIZAWA，Taichi
引用	北海学園大学人文論集(419)：186-193
発行日	2011-07-30

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

記録の中の〝おもちゃ〟と〝遊び〟
── 記録映像『沙流川アイヌ子どもの遊び』への出演経験を経て ──

パネリスト：貝　澤　太　一

○**岩崎**　次は，貝澤君に「記録の中のおもちゃと遊び」というタイトルで発表をお願いいたします。

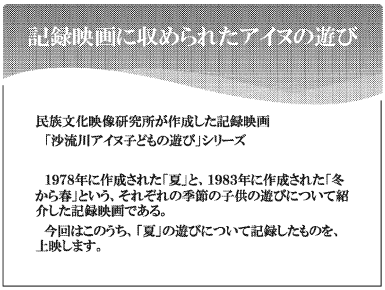
○**貝澤**　初めまして。初めての方もいますし，いろいろお世話になった方もいますけれども，貝澤と申します。

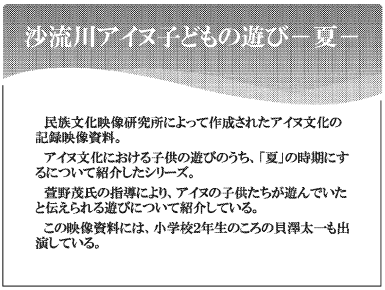
きょうは2時間ぐらいかけて，平取町の二風谷というところから来ました。

今回，メインの表題が「映画とおもちゃと博物館」ということで，映像の中で表現されているアイヌの子供の遊びというのがあるのですけれども，それの中で出てくるおもちゃとか，子供の遊びの方法とか，そういうものがどのように表現されているかというのをお話ししたいなということで，こういう場をいただきました。大石先生もオーバーしたのですけれども，僕もオーバーする可能性がありますが，それはちょっと御了承ください。

記録映画の中におさめられたアイヌの遊びということで，きょうは後ほどお見せしますけれども，民族文化映像研究所というところが作成した『沙流川アイヌ子供の遊び』シリーズというのがありまして，これには1978年に作成された夏のバージョンと，1983年に撮影された冬から春というバージョンがあります。それぞれの季節のこどもの遊びについて紹介している記録映画です。今回，このうち夏のほうを上映したいと思います。

そもそも沙流川の夏というのは，民族文化映像研究所がアイヌ文化における子供の遊びについて，夏の期間にどのようなことをして遊んだかというのをアイヌ民族自身である萱野茂さんという方がいらっしゃったのです





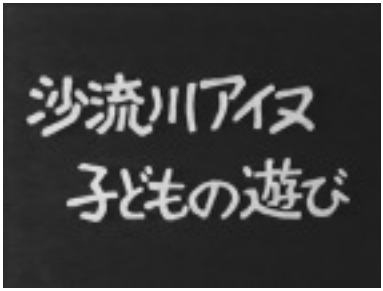
けれども，その人に教えていただきながら映像を記録するという方法をとっています。アイヌ自身がつくる記録映像なので，先ほど大石先生がやった日本人からのイメージとかとは逆のバージョンというか，自分たちから発信する形の映像になっています。

この映像の中には，30 年ほど前の貝澤太一が出ています。今とは違ってかなりかわいいので，それは探してみてください。

こっちでやるよりも DVD のほうがいいので。（映像放映）

これが昔，30 年ぐらい前の二風谷の光景です。

ここの最初の部分で，少し子供が遊んでいる光景があります。この白いパンツと黒いＴシャツが僕なんですけれども，今と比べるとかなりかわいい感じですね。このように鬼ごっことかというのも普通にやっていたというか，どちらかというとこちらの遊びのほうが一般的だったと記憶しております。



これは足かけ鬼という，やったことありますかね。時代が違いますね。すみません。

このビデオ自体は全部で50分ぐらいなので,少し飛ばしながらいきたいと思います。

これが僕です。かわいいですね，随分。自分が大きく映るところだけ映し出しているように見えますけれども，すみません。

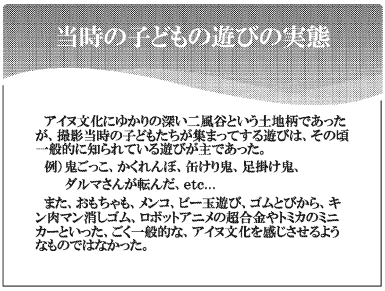
30年前の萱野茂さんはこんなに走っていたんですね。ここからアイヌの子供の遊びで特徴的なのは，先ほどのカックイもそうですけれども，これから出てくる，槍でものを突く動作をして，それが遊びになるというのがありまして，今その道具をつくっている様子もそうなんですけれども，こういう遊びの中で，これからの自分たちの狩猟とか，そういうものを自然と教えるという形の遊びも習いました。

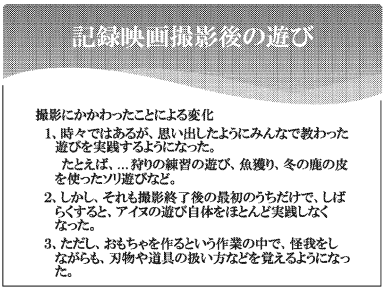
この後，弓矢をつくる所作があるのですけれども，ちょっと時間がないので飛ばして，二風谷のアイヌ民族博物館に行けばこのビデオは見られますので，ぜひ行ってみてください。

これはオオイタドリですね。ドングイとかドウグイという方言があるのですけれども，オオイタドリという節のある植物を使って笛をつくって遊ぶものです。この画像を見せたのは，後で実際に目の前でつくってみる時間があればつくってみようと思って見せています。このドングイ，萱野さんはラッパ草というのですけれども，結構いろいろな遊びに使えたりするというのも習ったりしました。

時間の関係で，もっと見せたかったのですけれども，とりあえず一旦ここでとめます。

それで，先ほども言ったのですけれども，二風谷というのはアイヌ文化に非常にゆかりの深い場所です。撮影当時，僕らの世代というのは，小学生や幼稚園児の遊びはだいたい，鬼ごっことか，かくれんぼとか，缶蹴り鬼とか，足かけ鬼，だるまさんが転んだとか，そういうものでしたし，おもちゃにしても，メンコとかビー玉，ゴム飛びとか，このころからキン肉マン消しゴムとか,ロボットアニメの超合金とか,トミカのミニカーといっ





たものが出始めていたので，そういうものを使って遊ぶ場合がすごく多かったんです。それに対して，この撮影が終わった後は，撮影にかかわったことによって，子供たち，僕らの世代とか友達とかは，時々ではあるのですけれども，思い出したようにみんなで教わった遊びを実践するようになりました。例えば先ほど映像に出ましたけれども，狩りの練習の遊びとか，見せられなかったのですけれども，弓矢をつくって魚とりをして焼いて食べたりとか，先ほど紹介しましたけれども，アイヌの遊びという映像には冬バージョンがあるのですけれども，冬バージョンでならったシカの皮のソリ遊びとか，そういうものを使った遊びをするようになりました。でもその遊びも，僕自身が大きくなったというのもあり，実践するのは最初のうちだけで，アイヌの遊び自体はほとんど実践しなくなってきてしまいました。ただ，その時代，僕がこれを習い，撮影をしたときに，いろいろなおもちゃをつくったりするときなどに，刃物を実際に萱野さんがさわらせてくれて，それでものをつくるということについて，刃物とか道具をたくさん使ったものですから，その扱い方をけがをしながらでも覚えるようになったというのはすごく大きなことだったと思います。

では僕らの前の世代の人たちはどうだったのかということで，自分自身の父に同じようなことを聞いていたのですけれども，僕が出ているビデオみたいなことをやったかというと，そんなことはやったこともない，普通の遊びをしていた，というふうに言っていました。ですので，先ほど萱野さんのセリフにもありましたけれども，僕自身もやったことがないけれど

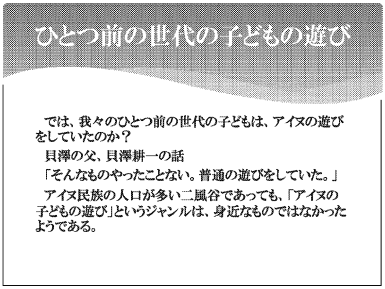
も，近所のじいさんたちが言っていたとか，そのような形で，実際にアイヌの遊びをやるということは相当古い世代からもう行われなくなっていたんだなというのがわかりました。

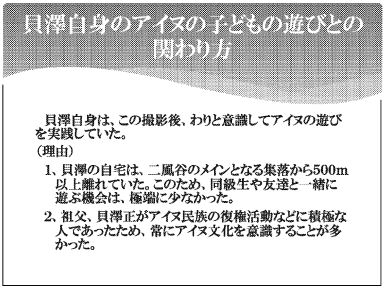
それに対して，僕自身なのですけれども，僕自身の意識を美化して書いているわけではないのですけれども，貝澤自身は，撮影が終わった後というのはわりと意識してアイヌの遊びを実践していました。というのは，いろいろな要因がありまして，一つは，僕自身の自宅というのは，二風谷のメインになる商店街というか集落があるのですけれども，そこから 500 メートルぐらい下流にあったものですから，同級生とか友達と一緒に遊ぶ機会が少なかったことです。

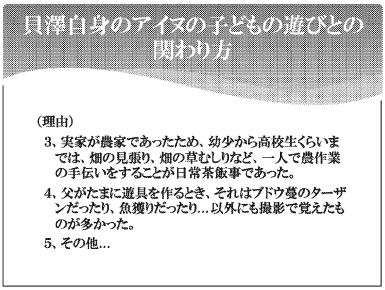
それと，貝澤正という僕のじいさまがいたのですけれども，貝澤正はアイヌ民族の復権活動に積極的に取り組んでいて，そのためにアイヌを意識することがすごく多かったというのもあります。

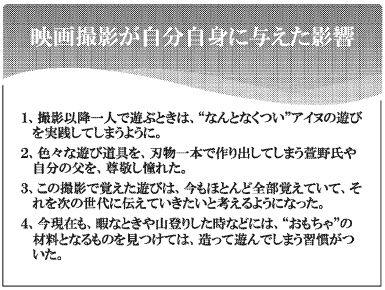
あと，実家が農家で，今も農家をやっていますけれども，幼少から高校ぐらいまでは畑の見張りとか，小さいときは畑の見張りをして，ハトとかカラスが飛んできたら外に出ていってロケット花火を用意してぴゅーっと飛ばして鳥を追い払うとか，そういうことをやらされていたんですね。あとは，畑の草むしりとかやっていて，そんなときに，少しさぼって１人で遊ぶことが多かったので，１人で遊ぶときとかに，さっき映像でも出ましたドングイでつくる笛とかをつくって遊んでいたりとかしていました。

あと，父がたまに遊ぶ道具をつくるときといったら，ターザンみたいに





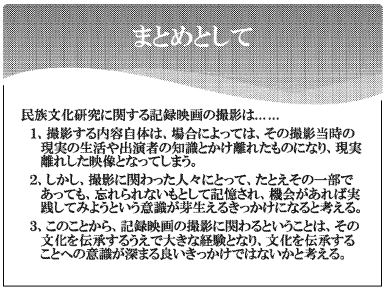




ブドウ蔓を切って，あまり想像できないですかね，木からブドウ蔓が垂れ下がっているのですけれども，それを切って，それでターザン遊びという言い方が正しいかわからないですが，そういうことをやったり，魚とりにも積極的に連れていってくれたりしたので，そういうところで撮影で覚えたことを反芻することが多かったです。

５でその他と書いてあるのは，小学校から中学校ぐらいまでいじめられっ子だったので，その要因があって，あまり友達がいなかったというのがあるのですけれども，そういうのも要因だったのかなと思っています。それで，自分自身でアイヌの子供の遊びを覚えているということがあったのではないかなと思っています。

撮影後，この映像の撮影が自分自身に与えた影響というのは，１人で遊ぶとき，何となくついアイヌの遊びを実践してしまうようになったことです。いろいろな遊び道具を刃物１本でつくり出してしまう萱野さんとか自分の父を尊敬して，あこがれて，ああなってみたいなと。魔法のようにおもちゃをつくっていくんですよ。そういうのがすごいなというふうに思って，そういうあこがれをもったり，今，僕自身がそこで覚えた遊びというのは結構ほとんど覚えていて，これを次の世代に伝えていけたらいいなというふうに思えるようになったのです。現在も，山登りとか，畑で仕事をしたりしたら，おもちゃの材料となるものをわりと探していたりとか，そういうものを探して，見つけたらそれをつくってしまう習慣がついたんですよね。それが撮影に参加することによって自分が受けた影響なのではな



いかと思っています。

まとめとしてなのですけれども，民族文化研究に関する記録映画の撮影というのは，撮影する内容自体は，場合によっては，先ほど僕らのケースもそうですけれども，その撮影当時の生活や出演者の知識とはちょっと離れた，現実離れした映像となってしまうことが多いと思うのです。ですけれども，撮影にかかわった人々にとっては，その一部ではあるかもしれないけども，忘れられない記憶として覚えていて，機会があれば実践してみようと意識するようになるというふうに考えます。

このことから，記録映画の撮影にかかわるということは，その文化を伝承する上で大きな経験となり，文化を伝承することへの意識が深まるきっかけになるのではないかと考えています。

ですので，映像のつくり方と，そこにかかわる人のかかわり方というのを注意すれば，それは後々の大きな財産になるのではないかというふうに思っています。

ということでまとめてみました。まとまっているのかどうかわからないですけれども，このような結果になりました。ありがとうございました。(拍手)

○**岩崎**　ありがとうございます。

みんな気になっているのはそこにあるものなのですけれども。

○**貝澤**　そうですね，やると言っておいて，時間がないからと思ったのですが，何のことはない，簡単なのです。ちょっとカッターが切れるかどう

かあれなのですけれども，後で片づけます。これをつくってみて，大人になってからわかったのですけれども，南米のサンポーニャでしたっけ，そういう楽器がありますよね。こういうふうにやって音を鳴らして，自分の気に入った音に変えるのです。ちょっと長かったので短くして，こういう形で，農作業の合間にいっぱいとってきて，いろいろな音を集めて，１人で演奏するという，暗い遊びをしていたんですけれども，その暗い遊びが意外と今になったら役に立ってしまったので，暗いのも捨てたものじゃないなというふうに思っています。御希望があれば，材料はいっぱいありますので，後でディスカッションのときでもつくりますので，お申し出てください。

　ということで，ありがとうございました。（拍手）

○**岩崎**　プログラムをつくったのは私で，全員に添付で回したのですけれども，いいよ，これで行こうということだったのですけれども，非常にのびのびと，皆さん時間を自由に変えてくださっているので，多分５時よりは少し長めに続くかなと思いますので，もし用事がある方は退席していただいて全く構いませんので。